

熊取町埋蔵文化財調査報告第13集

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅳ

1990年 3月

熊取町教育委員会

は し が き

熊取町は、大阪府の南部に位置し、和泉山系に源を発する雨山川、見出川によって育まれてきた土地であり、現在本町内には、周知の遺跡が37か所あります。これらの地域は、古くから開かれた場所であり、先人が自然と深く関わり合いながら、現在に至る文化を築き上げてきた歴史を物語る所でもあります。

土中に埋蔵されている先人の築いた文化は、我々に貴重な指針を与えてくれるものと思います。そして、このような文化財を保護保存していくことは、現在に生きる私達に与えられた義務でもあります。

しかし、“大阪は南部の時代”といわれ、近年特に宅地開発等が盛んに行なわれております。本町内におきましても例外ではなく、貴重な埋蔵文化財が破壊されようとしております。

このような状況のなか、本町教育委員会では、破壊される埋蔵文化財の記録保存を行うため、開発申請者等のご理解、ご協力を得て発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成元年度中に国庫補助金を受けて実施した調査結果を、概要報告書にまとめて発刊したものです。たとえ、わずかでも本書が文化財保護に貢献できればと念願するものであります。

最終となりましたが、現地での調査及び本書の作成にあたりまして、ご尽力ご教示をいただきました方々、並びに関係各位に対しまして感謝の意を表します。

平成2年3月

熊取町教育委員会

教育長 山中長正

例 言

1. 本書は熊取町教育委員会が平成元年度国庫補助事業（国補助率50%、府補助率25%、町負担率25%）として計画し、町史編さん室が担当・実施した熊取町遺跡群における個人住宅の建築等に伴う調査の概要報告書である。
2. 調査は熊取町教育委員会発掘調査嘱託員井田匡を担当として、平成元年4月1日に着手し、平成2年3月31日をもって終了した。
3. 調査の実施にあたっては土地所有者及び関係者各位から多大な協力を得た。明記して感謝する次第である。
4. 本書中の標高は東京湾平均海水面を基準としている。方位は地図以外は磁北を示すものとした。
5. 本書の執筆と編集は井田がおこなった。
6. 調査にあたっては、写真・実測図等の記録を作成すると共にカラスライドを作成した。広く利用されることを望む。
7. 本書では掲載している遺物について本文・図版及び挿図において同一番号か同一記号にて示すこととする。

本文目次

第 1 章	はじめに	1
第 2 章	東円寺跡89年-3区の調査	4
第 1 節	調査に至る経過	4
第 2 節	調査結果	4
第 3 節	小 結	5
第 3 章	東円寺跡89年-5区の調査	9
第 1 節	調査に至る経過	9
第 2 節	調査地区の名称と遺構の呼称について	10
第 3 節	調査の概要	11
第 4 節	東円寺跡89年-5区の検出遺構	11
第 5 節	出土遺物	20
第 4 章	ま と め	20

図版目次

図版第一	東円寺跡89年-3区 遺構検出状況 出土遺物
図版第二	東円寺跡89年-5区 (1) 遺構検出状況
図版第三	東円寺跡89年-5区 (2) 遺構検出状況
図版第四	東円寺跡89年-5区 (3) 遺構検出状況
図版第五	東円寺跡89年-5区 (4) 出土遺物 遺構検出状況
図版第六	東円寺跡89年-5区 (5) 出土遺物
図版第七	東円寺跡89年-5区 (6) 出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図	熊取町の位置	1
第 2 図	東円寺跡の位置及び遺跡分布状態	2

第 3 図	東円寺跡調査区位置図	3
第 4 図	東円寺跡89年-3区調査グリッド位置図	4
第 5 図	東円寺跡89年-3区Aグリッド平面及び断面図	4
第 6 図	東円寺跡89年-3区Bグリッド平面及び断面図	4
第 7 図	東円寺跡89年-3区出土遺物	5
第 8 図	東円寺跡89年-5区周辺平面図	7
第 9 図	東円寺跡89年-5区遺構面の標高	9
第 10 図	東円寺跡89年-5区調査地区割り図	10
第 11 図	東円寺跡89年-5区土層模式図	11
第 12 図	東円寺跡89年-5区平面図(1)	12
第 13 図	東円寺跡89年-5区平面図(2)	13
第 14 図	東円寺跡89年-5区S B-1平面図及び断面図	14
第 15 図	東円寺跡89年-5区Pit120断面図	15
第 16 図	東円寺跡89年-5区遺構番号図	17
第 17 図	東円寺跡89年-5区出土遺物	19

表 目 次

第 1 表	平成元年度個人住宅建築に伴う国庫補助調査一覧	1
第 2 表	東円寺跡89年-5区の建物跡一覧	15
第 3 表	東円寺跡89年-5区の遺構埋土法量一覧表	22

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅳ

— 平成元年度の個人住宅建築に伴う国庫補助による発掘調査 —

第1章 はじめに

平成元年度の個人住宅の建築等に伴う調査は東門寺跡のみで実施され、全部で4件の調査を実施した。その内訳は3件の本調査と1件の試掘調査の実施である。

申請者及び申請地の詳細については表-1に示したとおりである。

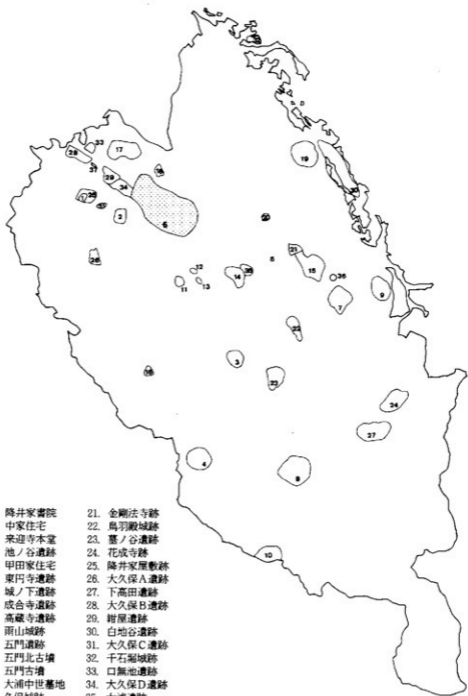
平成元年度の国庫補助調査を実施した調査区についての位置については調査区位置図を参照願ひ、結果については本文を参照願ひたい。



第1図 熊取町の位置

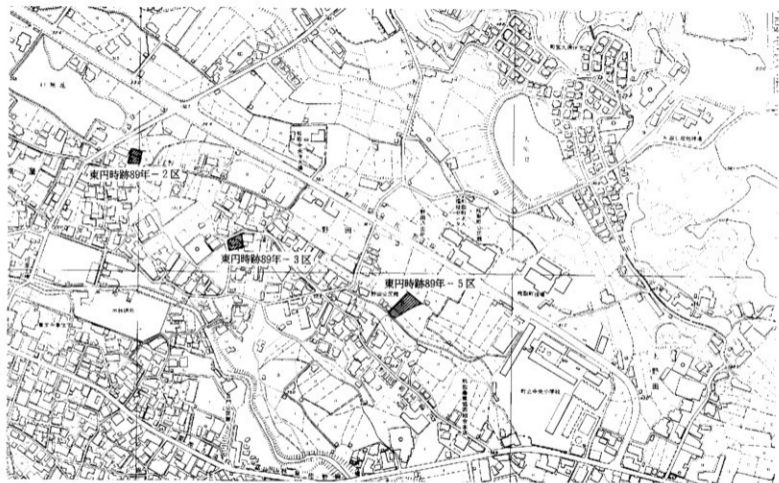
表-1 平成元年度個人住宅建築に伴う国庫補助調査一覧

申請者	申請地番	申請面積	備考
中西幹生	熊取町紺屋182-2	233 m ²	試掘・遺構遺物なし
藤原敏	熊取町野田2155-3	143 m ²	調査・本書掲載
藤原誠司	熊取町野田2155-3	141 m ²	調査・本書掲載
藤原一實	熊取町野田2318-2 2320-2	551 m ²	調査・本書掲載



- | | |
|------------|------------|
| 1. 降井家書院 | 21. 金剛法寺跡 |
| 2. 中家住宅 | 22. 鳥羽殿城跡 |
| 3. 来迎寺本堂 | 23. 壘ノ谷遺跡 |
| 4. 池ノ谷遺跡 | 24. 花成寺跡 |
| 5. 甲田家住宅 | 25. 降井家屋敷跡 |
| 6. 東円寺遺跡 | 26. 大久保A遺跡 |
| 7. 城ノ下遺跡 | 27. 下高田遺跡 |
| 8. 成合寺遺跡 | 28. 大久保B遺跡 |
| 9. 高藏寺遺跡 | 29. 柑屋遺跡 |
| 10. 雨山城跡 | 30. 白地谷遺跡 |
| 11. 五門遺跡 | 31. 大久保C遺跡 |
| 12. 五門北古墳 | 32. 千石堀城跡 |
| 13. 五門古墳 | 33. 口無池遺跡 |
| 14. 大浦中世墓地 | 34. 大久保D遺跡 |
| 15. 久保城跡 | 35. 大浦遺跡 |
| 16. 山ノ下城跡 | 36. 久保A遺跡 |
| 17. 大谷池遺跡 | 37. 大久保E遺跡 |
| 18. 祭礼御旅所跡 | |
| 19. 正法寺跡 | |
| 20. 小垣内遺跡 | |

第2図 東円寺跡の位置及び熊取町遺跡分布状態



第3図 調査地位置図

第2章 東円寺跡89-3区の調査

第1節 調査に至る経過

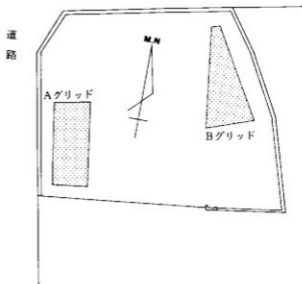
熊取町大字野田21
55-3番地において、
藤原敏氏・藤原誠司氏
が個人住宅の建築を計
画し、平成元年8月1
日付で文化庁長官宛の
土木工事に伴う埋蔵文
化財の発掘届出書並び
に熊取町教育委員会教
育長宛の埋蔵文化財包
蔵地の存在確認に伴う

技師派遣依頼書が熊取町教育委員会に提出
された。

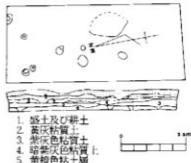
これを受けて熊取町教育委員会では同年
8月28日に機械により試掘調査を実施し、
遺構及び遺物包含層を確認した。これに基
づいて遺跡の取り扱いについて、熊取町教
育委員会と藤原敏氏・藤原誠司氏で協議を
行なったところ遺跡の重要性に鑑み調査を
実施することで合意した。

第2節 調査結果

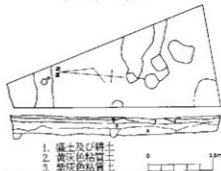
調査地点は小字名ではワサ田・カエリ長
田にあたる地点で、東円寺跡の範囲の南西
に位置する。周辺の地形は調査区から南に
位置する住吉川（大井出川）に向かって標



第4図 東円寺跡89年-3区調査グリッド位置図



第5図 東円寺跡89年-3区A
グリッド平面及び断面図



第6図 東円寺跡89年-3区B
グリッド平面及び断面図

高を下げており、北側の段丘および埋積谷に向かって標高が上がっている。

調査は藤原誠司氏からの申請地内にAグリッドとして21㎡のグリッドを設定し、藤原敏氏からの申請地内にBグリッドとして34㎡のグリッドを設定した。以下それぞれのグリッドの状況について述べることにする。

① Aグリッド

Aグリッドでは8個の柱穴と土壌を1基検出した。層序は現地表面より約30cmが盛土及び旧耕土で、以下2層の整地層が存在し、地山の黄橙色粘土層に至る。遺構は地山に直接掘削された形で検出した。

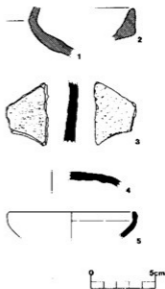
② Bグリッド

Bグリッドでは5個の柱穴と不整形土壌を1基、溝を1条検出した。層序はAグリッドとほぼ同じで、現地表面より30cmが盛土及び旧耕土で、以下2層の整地層が存在し、地山の黄橙色粘土層に至る。地山は南に向かって傾斜しており、遺構は地山に直接掘削された形で検出した。

③ 出土遺物

出土した遺物はいずれも破片で、わずかな量であった。器種が判別できるものでは須恵器の杯・蓋杯などである。

第7図1は瓦質の甕である。頸部外面にナデがみられる。2は瓦質のすりばちの口縁部である。3は須恵器の甕の体部で、4は須恵器の杯蓋の破片である。いずれも強く焼かれ、胎土も密である。5は須恵器の壺の口縁部とみられる。



第3節 小 結

当該地の調査では柱穴・溝などの遺構を検出し、時期的には8世紀後半とみられる須恵器の破片と14世紀～15世紀頃とみられる中世遺物が出土した。特に新たな知見はなかったが、

第7図 東円寺跡89年-3区
出土遺物

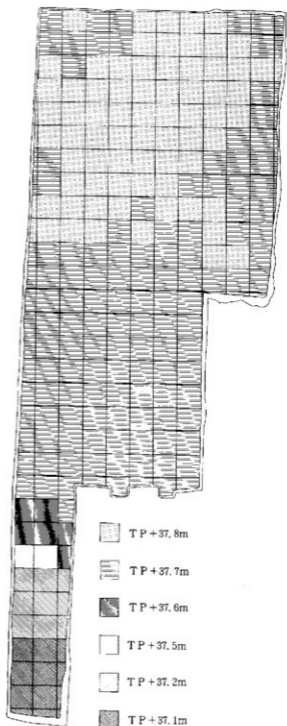
従来の調査地点より標高の低い地点の調査であり、また南に位置する住吉川に近い地点の調査であった。今後さらに調査を実施することにより野田の集落の成立や変遷、土地の利用方法などの資料がえられることと思われる。

第3章 東円寺跡89年-5区の調査

第1節 調査に至る経過

熊取町大字野田2318-2・2320-2番地において、藤原一實氏が個人住宅の建築を計画し、平成元年12月15日付で文化庁長官宛の土木工事に伴う埋蔵文化財の発掘届出書並びに熊取町教育委員会教育長宛の埋蔵文化財包蔵地の存在確認に伴う技師派遣依頼が熊取町教育委員会に提出された。

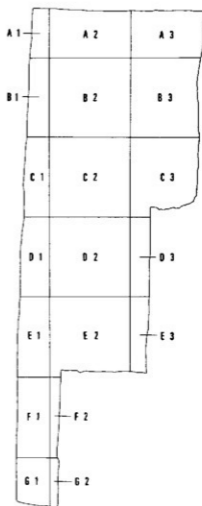
これに基づいて遺跡の取り扱いについて、熊取町教育委員会と藤原一實氏とで協議を行なったが、当該地周辺では昭和60年より多くの遺構・遺物が確認されており、隣接する東円寺跡87年-1区・2区では奈良時代の建物跡群が検出され、周辺でも珍しい製塩土器や土馬が出土している。これらの事例に基づいて遺跡の重要性に鑑み、調査を実施することとした。調査は平成元年12月19日着手し、平成2年2月21日終了した。



第9図 東円寺跡89年-5区の遺構面の標高

第2節 調査地区の名称と遺構の呼称について

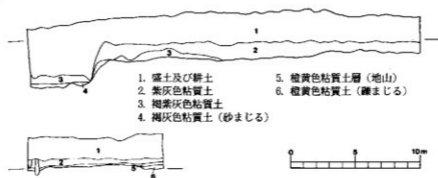
調査では5m四方の地区割りを実施することとした。南北方向は、アルファベットによる地区名で呼称し、A・B・C・Dと表すこととした。東西方向はアラビア数字による地区名で呼称し、1・2・3と表すこととした。本書中においても遺構などの位置の表し方はこれに準じて、A1・B2と表すこととする。また東円寺跡89年-5区の南北方向の基準線は東へ34°ふっている。さらに、調査を実施する際に遺構については、検出した順に遺構の略称とアラビア数字を組み合わせて呼称することとした。略称は溝をSD、柱穴をPit、建物跡をSB、柱穴列をSA、不整形土壇をSXとし、特殊な遺構はその形態や特徴で呼称することとしたが、本書中でもこれに準じてSD-1、SB-2と呼称することとする。



第10図 東円寺跡89年-5区調査地区割り図

第3節 調査の概要

調査を実施した地点は、小字名では堂の後と呼ばれる地点であり、推定寺域より南西方向へ150mの地点である。現状は水田で、地表面のレベルは東側の水田より約50cm程低く、標高は38m前後を測る。



第11図 東円寺跡89年-5区土層模式図

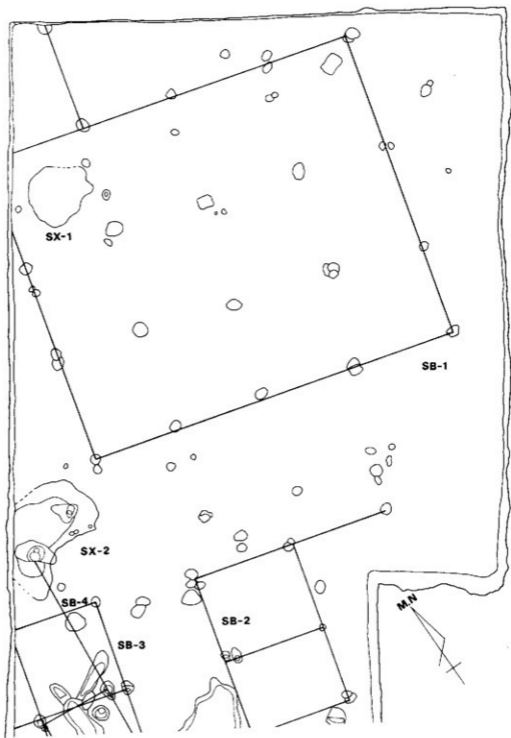
層序は単調で、地表面より深さ40cmが盛土及び耕作土で以下黄褐色粘質土層、紫灰色粘質土層が存在し、地山の橙黄色粘質土層に至る。また一部遺構の埋土から暗黄灰色粘質土がみられた。

検出した遺構としては、溝が3条、建物跡が5棟、土壌を2基、不整形土壌を5基検出し、柱穴も多数検出した。遺物の量は少なく、主に8世紀から14世紀までのもので、遺構に伴う出土遺物がほとんどである。また、近世の遺物が極端に少ないことから近世以降に水田の造成などの為に削平をうけているものと考えられる。以下主な遺構について述べるが、その他の遺構については一覧表(表-3)を作成したのでそれを参照願いたい。

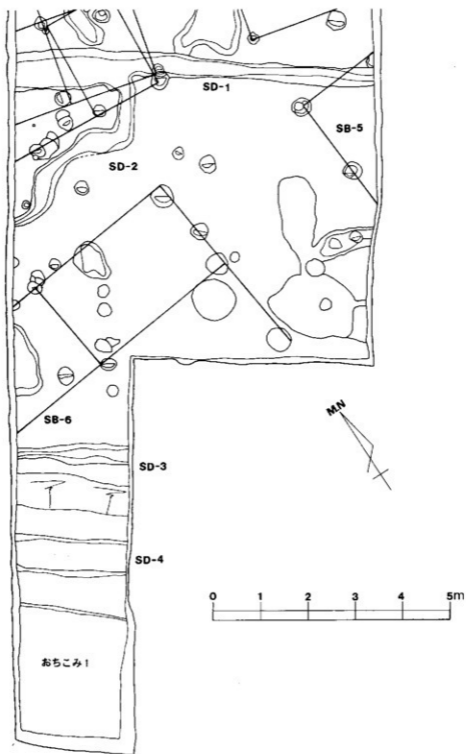
第4節 東円寺跡89年-5区の検出遺構

① 溝

溝は全部で4条検出した。SD-1は東から西に流れる溝で、最大巾61cm、深さ約6.5cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土である。SD-2は北から南に流れる溝で、最大巾26cm、深さ約40cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては、瓦器片や土師器片が少量出土している。



第12圖 東円寺跡89年-5区平面図(1)

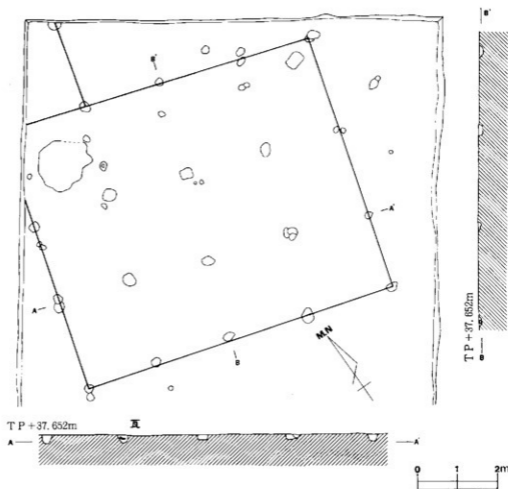


第13図 東円寺跡89年 - 5区平面図(2)

SD-3は東西に流れる溝で巾40cm深さ5cmを測る。遺構覆土は紫灰色粘質土で、出土遺物としては瓦器片や染付の破片などである。SD-4は巾50cm、深さ約10cmを測り、出土遺物としては瓦器片や染付の破片などである。SD-3、4については現在の土地区画と平行に存在することから、近世の溝と思われる。

② 建物跡

建物跡は全部で5棟確認できた。いずれの建物もその主軸は現在の土地区画

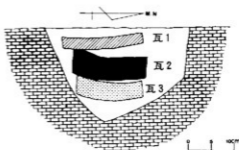


第14図 東門寺跡89年-5区SB-1平面図及びPit断面図

とは違った方位を示す。

S B-1は梁間4間、桁行4間の建物跡で、柱間は梁間が2m前後を測り、桁行が2.2m前後を測る。S B-1を構成している柱穴のP i t 1 2 3、P i t 1 2 0では柱穴の中に石や瓦を詰めている状態のものも

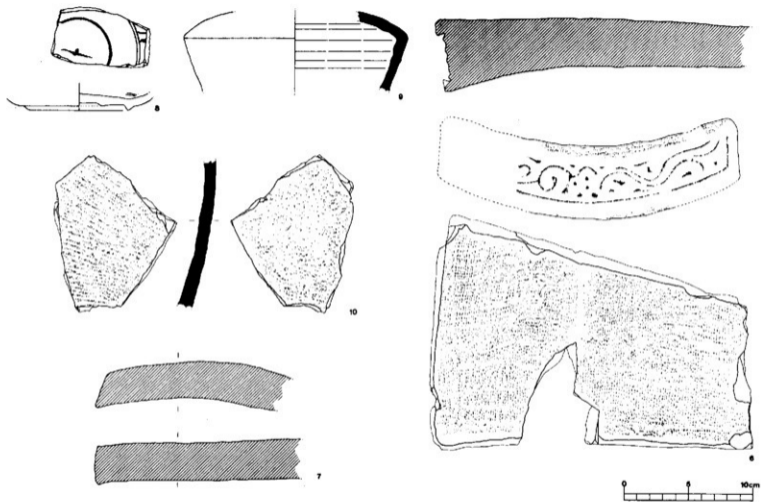
みられた。中でもP i t 1 2 0においては3枚の割れた瓦が積み重なった状態で出土している。(遺物番号6・7)その他の建物跡の規模などについては表2を参照願いたい。



第15図 東円寺跡89年-5区P i t 120 断面図

表2 東円寺跡89年-5区の建物跡一覧

遺構名	規 模	推定年代	建物主軸方位	出土遺物など
S B-1	2間×4間以上	13C~14C	東へ18°	瓦・根石出土
S B-2	2間×2間以上	不明	東へ14°	出土遺物なし
S A-3	2間	不明	東へ17°	出土遺物なし
S B-4	1間×1間以上	不明	西へ5°	出土遺物なし
S B-5	1間×1間以上	8C以降	東へ3°	土師器・須恵器破片



第17図 東円寺跡89年-5区出土遺物

第5節 出土遺物

東門寺跡89年-5区の出土遺物はすべて破片で、僅かな出土量であった。いずれも8世紀後半に時期を求めることができるであろう須恵器・土師器の破片と12世紀から14世紀の遺物である。

6はP i t 1 2 0から出土した唐草文軒平瓦である。瓦当と一辺が残存する破片で、瓦当は中心より左側が僅かに残存しており、直接范に瓦当を押し付けて作っているようである。凹面には布目跡がみられ、凸面には縦方向に粗略ながらヘラミガキが見られる。側端部はヘラケズリの後ユビナデを施してある。瓦当面の厚みは5.5cmを測り、瓦自体の厚みは3cm前後を測る。色調は青みがかった灰白色を呈しているが、やや軟である。胎土には2mm程度の石粒がまじる。7もP i t 1 2 0から出土した平瓦で、一辺が残存する平瓦である。8は耕作土の中から出土した伊万里の染付の皿である。呉須の色が淡く、高台は蛇の目凹型高台である。9は須恵器の長頸壺若しくは埴瓶の肩部と破片と思われる。10は須恵器の甕の破片である。

第4章 ま と め

平成元年度の個人住宅建築に伴う調査での調査結果については、前述のとおりである。周辺の調査と大差ない調査結果で、特に新たな知見はみられなかった。

東門寺跡89年-5区の北側及び西側に隣接する地点でも過去に調査を実施しているが、今回の調査結果とあわせて少しまとめておきたい。当該地周辺では建物跡をはじめとして多数の遺構を検出しているとともに溝などの遺構より多量の遺物が出土している。

まず当該地周辺で人の生活の痕跡が確認できるのは弥生時代である。少量の弥生土器とサヌカイト破片及び石鏝が確認されているが、遺構自体は確認されていない。当該地において遺構が確認されるのは8世紀後半からである。建物跡が確認されていることから小規模な集落として確定できるだろう。遺物とし

ては須恵器の甕や高杯・杯などが破片で出土しており、製塩土器や土馬の破片も出土している。

13世紀～14世紀ごろの遺物としては瓦器、東播系こねばち、瓦質甕などの生活什器が遺物として出土しており、また溝及び建物跡などの遺構も検出されている。建物跡の柱穴は石や瓦を柱の下に敷いていたらしく柱穴の中から瓦の破片もしくは石が出土する例もみられた。

また、近世の溝は現在の土地区画と平行であることから、現在の土地区画は近世の地割りを踏襲するものと考えられる。

ただ、8世紀後半の集落から12世紀までの遺構・遺物が全く確認されておらず、それらが存在しなかったのかいずれかの時期に削平されたのかは今後の課題である。

文末となったが調査の実施と本書の作成にあたり下記の人々の参加があった、明記して感謝の意を表する。

井手口大作、池辺吉也、上代憲史、義本哲司、安福佳代、辻本栄子、大門由香里、杉本由貴子、羽田修子、木村恵美子

註

- 1 井田匡『熊取町遺跡群概要報告書・Ⅱ』1988年3月熊取町教育委員会
- 2 東円寺跡87年-1区SX-1から8世紀後半の須恵器・土師器に混じって製塩土器と土馬の頭部の破片が出土した。これらの土器について雨乞いなどの儀礼に使用した可能性がある。
- 3 松村隆文『東円寺跡調査概要・Ⅰ』1986年3月 熊取町教育委員会
東円寺跡85年-1区として、大阪府教育委員会文化財保護課技師松村隆文氏が調査を担当した。
- 4 井田匡『東円寺跡発掘調査概要・Ⅴ』1989年3月 熊取町教育委員会
東円寺跡88年-5区においても唐草文軒平瓦が一点柱穴から出土している。
この瓦も柱の下に瓦を敷いたものと考えられる。

表-3 東円寺跡89年-5区埋土法量一覧表

遺構名	形状	法 量 (単位cm)			埋土及び遺物
		深 さ	長 軸	短 軸	
S X - 1	不 整 形	5	136	125	紫灰色粘砂・中世遺物
S X - 2	不 整 形	12	210	95	
S X - 3	不 整 形	12	134	97	
S X - 4	不 整 形	—	—	74	
S X - 5	不 整 形	7	153	53	
S D - 1	溝 状	2	—	61	
S D - 2	溝 状	19	—	40	
S D - 3	溝 状	4.5	—	44	近世遺物
S D - 4	溝 状	5	—	64	近世遺物
おちこみ1		20.5	—	—	近世遺物 礫まじる
S K - 1 A	楕 円	5.5	115	30	
S K - 1 B	楕 円	6	49	26	
S K - 1 C	楕 円	8.5	111	48	
S K - 1 D	楕 円	7	43	21	
S K - 2	楕 円	22	85	20	
S K - 3	楕 円	30	90	90	暗黄灰色粘質土
P 1 0 1	円	—	30	20	
P 1 0 2	楕 円	20	27	24	
P 1 0 3	楕 円	—	20	19	
P 1 0 4	楕 円	10.5	23	15.4	
P 1 0 5	楕 円	10.5	21.8	17.6	
P 1 0 6 A	楕 円	—	23	10	
P 1 0 6 B	楕 円	7.5	23	21	
P 1 0 7	円	11	20	20	
P 1 0 8	楕 円	—	15	12	
P 1 0 9	楕 円	—	20	18	
P 1 1 0	楕 円	—	30	21	
P 1 1 1	不 整 形	—	38	31	

遺構名	形状	法 量 (単位cm)			埋土及び遺物
		深 さ	長 軸	短 軸	
P112	楕 円	12	27	26.4	
P113	楕 円	—	25	24.4	
P114A	楕 円	—	24	22	
P114B	円	—	20	20	
P115A	楕 円	—	28	24	
P115B	楕 円	—	25	21	
P116	楕 円	10	27	22	
P117	楕 円	23	36.2	31	
P118	楕 円	—	37	34	
P119	楕 円	17	32.9	31.3	
P120	円	—	31	31	唐草文軒平瓦出土
P121	楕 円	16	30.2	25	
P122A	楕 円	—	27	10	
P122B	楕 円	—	24	16	
P122C	楕 円	10	20	17	
P201A	楕 円	—	26	13	
P201B	楕 円	—	20	16	
P202	楕 円	4.5	21.5	19	
P203	不整形	7.5	26	24.5	
P204	楕 円	5.5	27	24	
P205	楕 円	—	14	13	
P206	楕 円	—	26	20	
P207A	楕 円	12	21	17	
P207B	楕 円	—	17	12	
P208	楕 円	—	24	23	
P301	楕 円	16	41	36	暗黄灰色粘質土
P302	楕 円	13	36.5	28	暗黄灰色粘質土

遺構名	形状	法 量 (単位cm)			埋土及び遺物
		深 さ	長 軸	短 軸	
P 3 0 3	楕 円	10.5	41	33	暗黄灰粘質土
P 3 0 4 A	楕 円	26	30	28	暗黄灰粘質土
P 3 0 4 B	楕 円	—	46	36	暗黄灰粘質土
P 4 0 1	楕 円	13.5	30	14	暗黄灰粘質土
P 4 0 2	円	9.5	42	38	暗黄灰粘質土
P 4 0 3	楕 円	6.5	42	34	暗黄灰粘質土
P 5 0 1	楕 円	16	50	45	暗黄灰粘質土
P 5 0 2	円	18	48	48	暗黄灰粘質土
P 5 0 3	円	—	30	27	暗黄灰粘質土
P 1	円	—	20	20	
P 2	楕 円	4.5	15.8	14.8	
P 3	楕 円	5.2	15	13.6	
P 4	楕 円	—	47	29	
P 5	楕 円	—	15	13	
P 6	楕 円	—	27	23	
P 7	楕 円	11	20	19	
P 8	楕 円	2	14	13.2	
P 9	楕 円	5	29	16	
P 1 0	楕 円	8	14	10.6	
P 1 1	楕 円	—	17	13	
P 1 2	楕 円	—	17	13	
P 1 3	楕 円	—	12	11	
P 1 4	円	—	18	18	
P 1 5	楕 円	—	25	12	
P 1 6	楕 円	—	22	19	
P 1 7	楕 円	—	22	13	
P 1 8	楕 円	—	14	13	

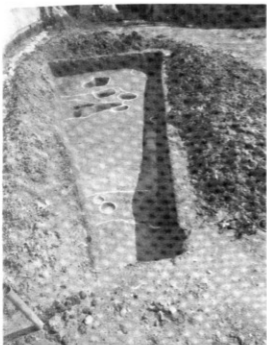
遺構名	形状	法 量 (単位:cm)			埋土及び遺物
		深 さ	長 軸	短 軸	
P 1 9	楕 円	—	23	12	
P 2 0	楕 円	—	30	16	
P 2 1	楕 円	—	30	25	
P 2 2	楕 円	—	12	19	
P 2 3	楕 円	—	28	22	
P 2 4	楕 円	3.5	9	7	
P 2 5	楕 円	—	28	23	
P 2 6	円	20	28	28	
P 2 7	楕 円	7	40	30	
P 2 8	楕 円	12	27	24	
P 2 9	楕 円	—	19	16	
P 3 0	楕 円	—	38	26	
P 3 1	楕 円	—	34	24	
P 3 2	楕 円	—	30	17	
P 3 3	楕 円	12.5	38	22	
P 3 4	楕 円	12.5	37	35	
P 3 5	楕 円	—	—	23	
P 3 6	楕 円	14	32	27	
P 3 7	楕 円	7	27	23	
P 3 8	楕 円	1	19	17	
P 3 9	楕 円	10	31	24	
P 4 0	楕 円	22	30	25	
P 4 1	楕 円	12	32	20	
P 4 2	楕 円	—	16	13	
P 4 3	楕 円	—	42	32	
P 4 4	楕 円	—	16	14	
P 4 5	楕 円	—	22	14	

遺構名	形状	法 量 (単位cm)			埋土及び遺物
		深 さ	長 軸	短 軸	
P46	楕 円	10	21	18	
P47	楕 円	—	18	16	
P48	楕 円	—	27	25	
P49	楕 円	11.5	39	32	
P50	楕 円	6	35	25	
P51	楕 円	—	38	26	
P52	楕 円	6.5	42	33	
P53	楕 円	1	25	22	
P54	楕 円	6.5	28	24	
P55	楕 円	6	31	30	
P56	楕 円	—	12	9	
P57	楕 円	17	25.5	18	
P58	楕 円	—	11	10	
P59	楕 円	—	18	14	
P60	楕 円	—	18	12	
P61	楕 円	—	12	10	
P62	楕 円	11.5	36	32	
P63	楕 円	—	23	—	
P64	楕 円	16	30	24	
P65	楕 円	—	30	25	
P66	円	—	30	30	
P67	楕 円	—	25	20	
P68	円	—	26	25	
P69	楕 円	—	27	22	

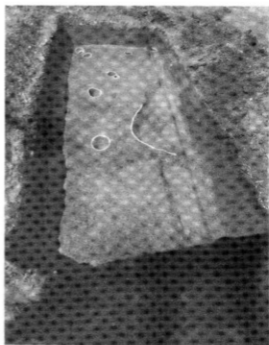
註 遺構埋土は特に記入のないものは紫灰色粘質土です。

圖

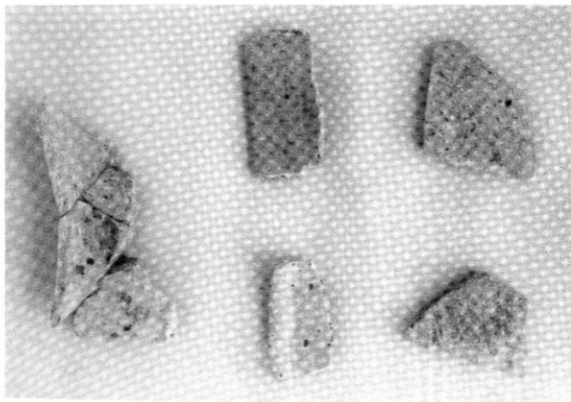
版



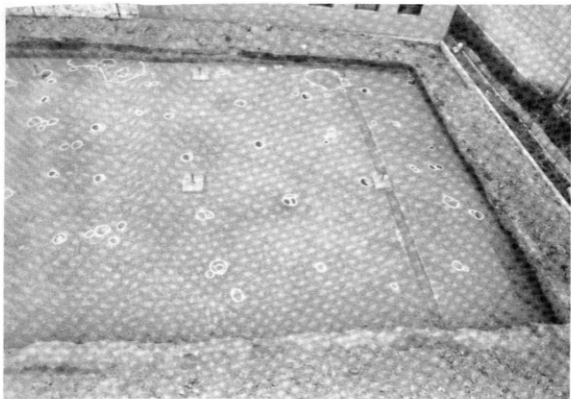
B グリッド遺構検出状況（北から）



A グリッド遺構検出状況（北から）



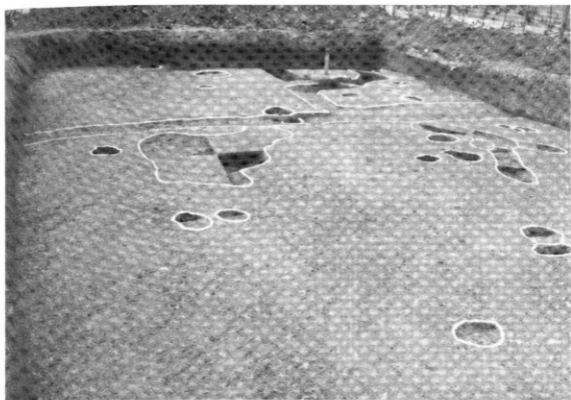
東円寺跡89年-3区出土遺物



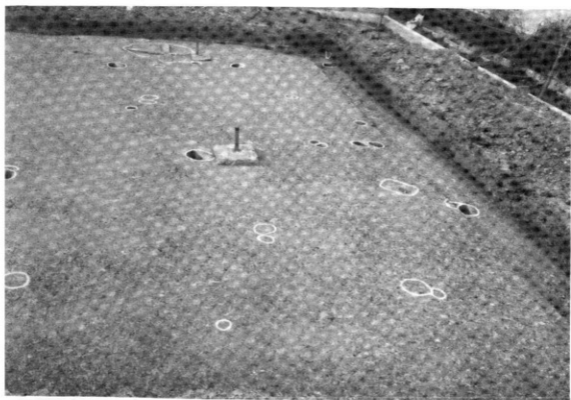
調査区北西をのぞむ



調査区南西をのぞむ



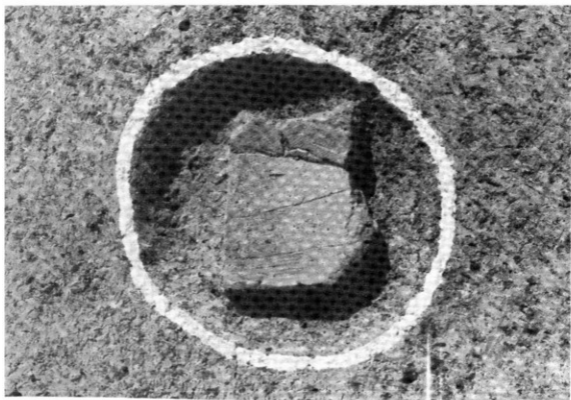
遺構検出状況（北から）



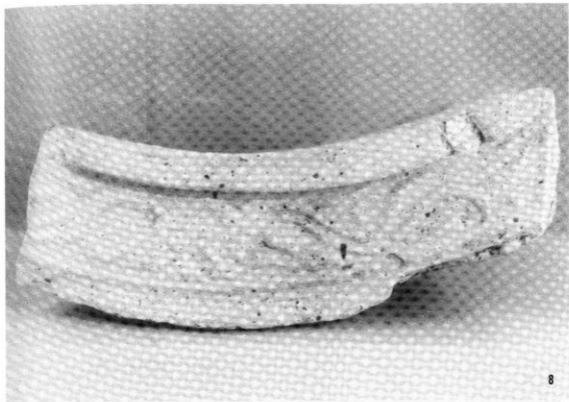
遺構検出状況（東から）



調査区北をのぞむ



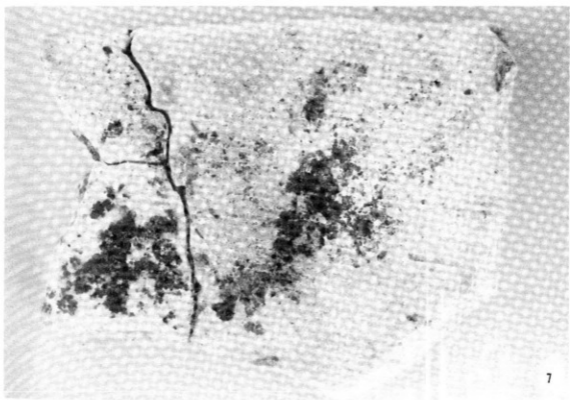
Pit120瓦検出状況

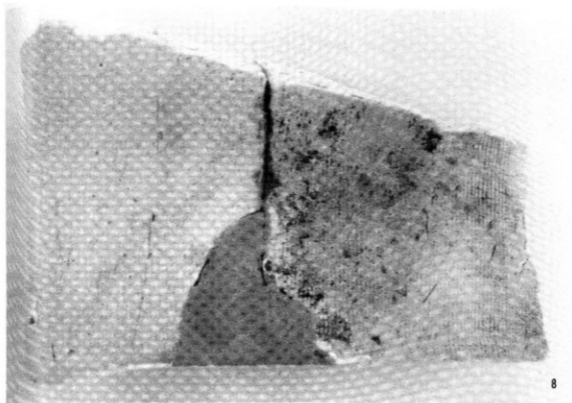


8

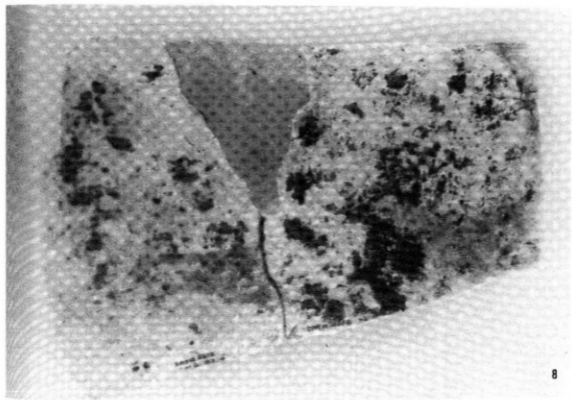
Pit 120出土唐草文軒平瓦







8



8